

| | 学位記 | 文科省報告 |
|------|------|-------------|
| 2004 | 3827 | 甲 ② 1893 |

博士論文審査要旨

論文提出者： 鈴木健司

論文題目： 宮沢賢治研究 ――文学における宗教と科学の位相――

主査：早稲田大学教授

千葉俊二

副査：元早稲田大学教授

原 子朗

副査：早稲田大学教授

高橋世織

副査：早稲田大学教授

東郷克美

1 本論文の構成

本論文は、既に刊行された『宮沢賢治 幻想空間の構造』（蒼丘書林、1994年10月）および『宮沢賢治という現象』（蒼丘書林、2002年5月）をもとに、「文学における宗教と科学の位相」という副題に用いられたテーマのもとに再構成されたものである。構成は序論、第一部「詩研究」、第二部「童話研究」、第三部「比較研究」、第四部「周辺研究」という四部構成からなり、収録した論文数は序論を含め十六本である。

序論として置かれた「《心象スケッチ》の目的―田中智学とウィリアム・ジェームスの視点から―」は、賢治の創作理論に関する論究であり、第一部から第四部までの各論文に通底する基礎的な部分を支えるものである。

第一部「詩研究」には、「青森挽歌」（『春と修羅』第一集）に関する論考二本と、「〔北いっぱいの星ぞらに〕」（『春と修羅』第二集）に関する論考二本を収める。両詩篇とも賢治の思想・体験が複雑に織り込まれており、『春と修羅』第一集、第二集をそれぞれ代表する作品となっている。また、第三部で扱う「銀河鉄道の夜」の成立とも内部で深く関わっており、賢治文学における詩と童話という二つのジャンルの生成に関わる根源的な課題も照射するものとなっている。

第二部「童話研究」は、最も難解とされる「銀河鉄道の夜」一篇に研究対象を絞り、それぞれ異なった視点から書かれた四つの論考を並立させている。それによって、賢治文学の多面性・多様性に対応させているが、その四つの視点とは、賢治の《空間》意識、日蓮主義者としての賢治、キリスト教への違和と親和、往く者と残される者という各課題である。

第三部「比較研究」は、賢治作品の近代文学としての普遍性を明らかにすることを目指し、現代作家との比較研究を試みている。対象とした作家は、坂口安吾・遠藤周作・大江健三郎の三人である。

第四部「周辺研究」には、年譜的問題を扱った論考を一本と、受容史的問題を扱った論考を三本を収めた。新資料としての近森善一（童話集『注文の多い料理店』の刊行者）へのインタビューテープの発掘は、等身大の賢治を知る上での貴重な資料である。賢治受容に関しては、同時代の詩人岡本弥太の賢治受容、《宗教的欲求の時代》としての現代における賢治受容、《聖人》賢治像への反発から生じる反動的な賢治受容を取り上げ検証することにより、賢治受容の複雑・多様なあり方を明らかにすることを試みている。

本論文の目次は以下のとおりである。

序論

《心象スケッチ》の目的—田中智学とウィリアム・ジェームスの視点から—

第一部 詩研究

第一章 「青森挽歌」研究・1

《心象スケッチ》の時と場所—再構成された体験—

第二章 「青森挽歌」研究・2

「ヘツケル博士！」の解釈をめざして—唯物論と唯心論の狭間で—

第三章 「〔北いっぱい星ぞらに〕」研究・1

《異の空間》と《銀河の窓》の意味するところ—科学的宇宙観と仏教的宇宙観—

第四章 「〔北いっぱい星ぞらに〕」研究・2

《一七九》草稿群の成立と解体—転生する《心象》—

第二部 童話研究

第一章 「銀河鉄道の夜」研究・1

銀河世界の成り立ち—神話（宗教）・科学・心理—

第二章 「銀河鉄道の夜」研究・2

《ジョバンニ》の行方—日蓮主義による世界統一の夢—

第三章 「銀河鉄道の夜」研究・3

「たった一人の神さま」というディレンマ—賢治と宣教師ミス・ギフォード—

第四章 「銀河鉄道の夜」研究・4

よだかからジョバンニへ—《よだか》の系譜—

第三部 比較研究

第一章 坂口安吾小論—《救いのなさ》ということ—

第二章 遠藤周作小論—神の温もりと神秘主義—

第三章 大江健三郎小論—反転の思想—

第四部 周辺研究

第一章 童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐる—発行者・近森善一の談をもとに—

第二章 詩集『春と修羅』の同時代的受容—土佐の詩人・岡本弥太の宮沢賢治理解—

第三章 《宗教的欲求の時代》と賢治受容—宮沢賢治生誕百年の喧騒—

第四章 「批評空間」における宮沢清六氏批判の言説—宮沢賢治の法華経信仰と国柱会—

2 各章の概要と論評

序論

《心象スケッチ》の目的—田中智学とウィリアム・ジェームズの視点から—

賢治の作品は《心象スケッチ》という独自の創作方法のもとに成立をしている。本章では、賢治の考える《如来の表現》という創作目的と《心象スケッチ》という創作方法とが、賢治のなかでどのように関連づけられていたのかを論証している。幻覚・幻聴の所有者である賢治が《心象》を《スケッチ》するに至った過程を、国柱会田中智学の『本化妙宗式目講義録』における無意識部の解釈と、心理学者ウィリアム・ジェームズの『宗教的体験の諸相』における無意識部の解釈との関連で考察し、ジェームズのいう「『天使と蛇』とが、並び住んでいる」「大なる副意識的あるひは超縁辺的な境界」（無意識領域）と賢治の《幻想》体験が照応していることを論じる。そして、賢治はウィリアム・ジェームズの心理学を、田中智学のいう「第九識^{あんま}菴摩羅識」（本仏の識）の科学的な検証方法として採用し、その検証材料として自己の《心象》を《スケッチ》したと結論づけている。

本章は、本論文の全体的方向を決定づける重要な一章である。これまで賢治のジェームズ受容に関しては若干の言及もあるが、これほど本格的に論証した論文はない。「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直感の一致に於て論じたい」（「農民芸術概論綱要」）という賢治の基本理念を、ここでは科学を心理学、宗教を日蓮教学、直感を幻想体験と読み替えることで、賢治文学の基本的な構造を見事に解明しており、その論旨には十分な説得力がある。

第一部 詩研究

第一章「青森挽歌」研究・1

《心象スケッチ》の時と場所—再構成された体験—

『春と修羅』所収の「青森挽歌」にスケッチされた賢治の心象や車窓からの風景は、二五〇行を超える詩作品内部においてかならずしも読者に一貫した解釈を許すものでなく、これまで様々な解釈の揺れを生じさせてきた。本章においては、詩内部の矛盾を《心象スケッチ》のもつ必然的矛盾とする解釈の立場から、《心象スケッチ》としての「青森挽歌」の時と場所に関し、「さびしい停車場」の時と場所を中心に再構成された体験として創出された可能性を追究している。その論証過程で、汽車は「さびしい駅」を通過中であつたという新見解や、乙供駅という現実の駅の想定を導入している。

本章はその実証性においてややマニヤック的な要素もなくはなく、本論文の宗教と科学との相関関係の究明というテーマからやや離れてしまったという難点もある。が、これまで解釈が揺れていた「青森挽歌」の細部の読みを、当時の列車の時刻表や気象条件、月齢、日の出時刻など、きわめて実証的な調査に基づき、詳細な検証を加えており、ここに提示された仮説は、趣旨が一貫していて矛盾がなく、今後の「青森挽歌」研究に有効な視点を提供していることは疑いない。

第二章「青森挽歌」研究・2

「ヘッケル博士！」の解釈をめざして—唯物論と唯心論との狭間で—

「青森挽歌」における最大の謎とされる「（（ヘッケル博士！／わたくしがそのありがたい証明の／任にあたつてもよろしうございます））」に関して、先行研究としての小野隆祥の論を再評価する立場から、恩田逸夫や龍桂花、大塚常樹の諸論に対しその問題点を検証・訂正し、同時にヘッケルの著作の精密な読解をもとに、これまで解決をみることのなかった靈魂死滅説と靈魂不滅説との解釈上の対立に決着をつけべく目論まれた論文である。

本章は、本論全体において中核をなす重要な論文である。これまで唯物的進化論者と目されてきたヘッケルの進化論を賢治がどのように受容したかという問題を、賢治が目に触れる可能性のあった当時の科学思想書を網羅的に洗いだし、『生命の不思議』『宇宙の謎』に説かれたヘッケルの一元論的な万物有生論が、「天台（日蓮）教学としての法界成仏（山川草木を含む成仏）思想の裏付けになった」のではないかと推論する。少なくともヘッケルの「モネラ」やライブニッツの「モナド」といった概念は、賢治にとって親和的であり（これらの単語を賢治は作中に繰り返し使用している）、その生命論的宇宙観が、賢治にとって自身の依拠する天台（日蓮）教学の宇宙観と抵触しないことを指摘し、それと詩中に言及される『俱舍論』とを関連させながら、詩の解釈を提示している。本章で扱われたテーマの性格上、論がややもすると概念的となり、言葉によって構築された文学作品として読むことがなおざりになっている感もなくはないが、本章は間違いなく、これまでの「青森挽歌」の解釈を大きく前進させるものとなっており、今後この詩を問題とするには本論文を抜きには論ぜられないことになるだろう。本章は一篇の詩の解釈にとどまらず、賢治の宇宙論を展開した力作であり、その後の『銀河鉄道の夜』の読解の前提ともなっている。

第三章「〔北いっぱい星ぞらに〕」研究・1

《異の空間》と《銀河の窓》の意味するところ—科学的宇宙観と仏教的宇宙観—

『春と修羅』第二集（生前未刊行）所収の「〔北いっぱい星ぞらに〕」は六種類の下書稿をもつ複雑な詩篇であり、下書稿に見出される《異の空間》や《銀河の窓》は、童話「銀河鉄道の夜」を読み解くキーワードでもある。本論では「先駆形A」「先駆形B」とよばれる下書稿段階での用語の書き換えや意味の差異に着目し、「先駆形A」から「先駆形B」への書き換えは、対象となる宇宙空間の拡大を伴う本質的な書き換えであり、科学

的空間としては《太陽系》から《銀河系》へ、仏教的空間としては《天界》から《仏界》へと拡大し、それぞれ、銀河＝宇宙説から島宇宙説へ、俱舍論から華嚴經へと、認識の核となる思想を移しながら書き換えがなされていったとの解釈を提示している。

これまでもこの詩篇は「銀河鉄道の夜」と密接な繋がりがあるものとして注目されてきたが、この章では校本全集の校異を丹念にたどりながら、下書稿の生成過程を明らかにして、従来の研究では「香食類」から「異の空間」さらに「銀河の窓」への推敲が、単なる言葉の言い換えと解釈されてきたところを、そこには大きな断層というべきものがあり、推敲により主題の変更がもたらされているのだという指摘は充分説得的である。さらにその推敲過程の検討を通して賢治の宇宙観を解明してゆく展開にはスリリングなものがあり、論者の実証的研究の冴えを見せた論である。

第四章「〔北いっぱい星ぞらに〕」研究・2

《一七九》草稿群の成立と解体—転生する《心象》—

「〔北いっぱい星ぞらに〕」に関し、その六種類の下書稿が新たに三段階に区分できることを指摘し、それぞれの下書稿段階が《地上ヴァージョン》《天界ヴァージョン》《仏界ヴァージョン》という三種に該当することを論証する。さらに、それらの三段階の下書稿はあたかも《転生》する《心象》を示していること、また、必ずしも時間の経過にそったものでなく、賢治の内部では、各ヴァージョン段階でスケッチされた《心象》が共時的存在として響きあっていた可能性が指摘できるとし、賢治における改稿の本質的意味に迫っている。

本章は前章の論旨を補完するものであり、一九二四（大正十三）年八月十七日の日付をもつこの詩篇に表現された実際の星空をプラネタリウムで再現して確認するなど、論理構築と実証性を見事に融合させた論である。

第二部 童話研究

第一章「銀河鉄道の夜」研究・1

銀河世界の成り立ち—神話（宗教）・科学・心理—

「銀河鉄道の夜」に描き出された銀河世界は、きわめて解釈の困難な空間として存在している。おそらくそこは、宮沢賢治という作家の宗教性や科学性、さらには心理学的特性といった要素が、原型をとどめぬほど複雑に溶け合って成立している世界である。「銀河鉄道の夜」の難解さの一因が銀河世界の複雑さにあるという視点に立ち、銀河世界の成り立ちや構造化を、「神話（宗教）としての銀河世界」「科学としての銀河世界」「心理としての銀河世界」という三つの観点から分析・検証している。「神話（宗教）としての銀河世界」では主人公ジョバンニの銀河世界の認識のありように注目し、それが科学者賢治としてではなく宗教者賢治としての認識を示していること、「科学としての銀河世界」では銀河世界を支える《エネルギー論》に注目し、当時最新の科学としてあった《原子論》

との関係を精査、賢治の科学的知識は必ずしも当時最新のものでなく、基本的には盛岡高等農林学校時代の『化学本論』（片山正夫著）のそれであったこと、「心理としての銀河世界」では賢治のさまざまな心理学的特性に注目し、それが銀河世界の成立とどのように深く関わっていたかを検証している。

本章は第一部第二章と並び、本論文の中核をなす重要論文である。「銀河鉄道の夜」に描かれた幻想空間としての銀河世界を、羅須地人協会の教材用に作られた「教材絵図——原子・分子」や賢治の残したメモ、他作品などの記述から、賢治の描いた銀河世界の特質を明らかにし、そこから難解な「銀河鉄道の夜」の細部の読みを展開しており、「銀河鉄道の夜」論の新たな地平を切り拓いている。片山正夫の『化学本論』やジョンミルス原著、寮佐吉訳の『通俗電子及び量子論講話』などを精査し、当時行われていた最先端の科学理論と賢治の理解していたそれとの落差を検証するなど、今後の賢治研究に寄与するところ多い論であると思われるが、宗教、科学、文学という概念的枠組みにややとらわれ過ぎた嫌いもなくはない。こうした概念的思考から抜け出し、トータルな文学作品としていかに読むかということが今後の課題であろう。

第二章「銀河鉄道の夜」研究・2

《ジョバンニ》の行方—日蓮主義による世界統一の夢—

「銀河鉄道の夜」にはテキスト上、キリスト教への親和的要素が数多く見出される。本章ではまず、作品の底に潜められた思想が、当時賢治が傾倒していたファシズム的日蓮主義者であり、国柱会の設立者田中智学の思想に近いものであることを立証し、本作品もまた押野武志（『宮沢賢治の美学』）のいう《美学化》の危険性を内包した作品であることを指摘している。その上で、主人公ジョバンニが少年として設定されていることの意味を問い直すことにより、「銀河鉄道の夜」のテキストが主張している思想は、結果としてファシズムへの傾斜をまぬがれたものであったと結論づけている。

第四部第四章にも言及されている「【共同討議】宮沢賢治をめぐって」（「批評空間」Ⅱ - 14、平9）で展開された賢治批判にも見られるように、ともすれば聖人視されがちな賢治には、国柱会のファシズム的日蓮主義者であった田中智学とも共通する危険な要素も内包されている。本章は、「銀河鉄道の夜」に描かれたキリスト教や「ほんたうのさいはい」ということに関連させながら、その点に真正面から対峙した論である。田中智学の思想やキリスト教観を丁寧に洗いだしながら、賢治のそれと対比しており、賢治研究者としての論者の姿勢を明確に提示している。

第三章「銀河鉄道の夜」研究・3

「たった一人の神さま」というディレンマ—賢治と宣教師ミス・ギフォード—

「銀河鉄道の夜」にはキリスト教と仏教（法華経）との対立の問題が指摘できる。賢治はそれにどのような結末を与えたのか。本章では、まず賢治の信じた日蓮の宗教とキリスト教との関係を考察し、その上で、キリスト者「かほる」のモデルとして宣教師ミス・ギ

フォードという女性の存在を取り上げ、賢治との関わりを軸に、「銀河鉄道の夜」のもつ宗教的課題について分析を進めている。結論として、賢治は自己をジョバンニとして信仰を確立する以前の年齢に引き下げることにより、ミス・ギフォード（かほる）との宗教的対立を回避したとしている。

本章は前章を補完するものであり、「銀河鉄道の夜」におけるキリスト教の問題を「かほる」のモデルにも擬せられる宣教師ミス・ギフォードとの関連から論じている。ミス・ギフォードに関してはこれまで余りよく分かっていないところも多かったが、本章には論者によって新たに発掘された関連資料が紹介されており、これによってかなり明確になった。これらの関連資料ははなはだ有効性の高いものであり、ミス・ギフォードと「銀河鉄道の夜」との関連性が明らかにされたことは大きな功績である。

第四章「銀河鉄道の夜」研究・4

よだかからジョバンニへ―《よだか》の系譜―

ジョバンニという一人の孤独な少年が銀河世界を旅するという作品構造は、その原型を初期作品としての「よだかの星」に見出すことができる。本章は、先行研究の天沢退二郎の論を受け継ぐかたちで、地上に戻ることの許されなかったよだかが、どのようにしてジョバンニとして地上に戻ってきたのか、その根源的な回転を問うている。具体的には、論者が《よだかの系譜》と呼ぶ、「〔北いっぱい星ぞらに〕」「黄いろのトマト」「十力の金剛石」などを比較対象作品として取り上げることにより、よだかからジョバンニへの変化を賢治の最終的にたどりついた思想的着地点として立証している。

本章は論者の「銀河鉄道の夜」論のまとめとして、賢治文学の全体の中でこの作品の占める位置を測定し、おおむね妥当な結論に達している。

第三部 比較研究

第一章 坂口安吾小論―《救いのなさ》ということ―

坂口安吾は「教祖の文学」において、小林秀雄を批判するに宮沢賢治の詩「眼にて云ふ」を引き合いに出した。その事実からすれば、安吾は、賢治以外であっては小林批判の企図を果たし得ないとの判断を有していたことになる。おそらく、安吾が賢治に見出したものは、小林批判に止まらず広く日本近代文学に対峙するものとしての何かであった。本章では、「教祖の文学」を糸口に、安吾と賢治という一見相反したイメージに包まれた二人に通底する《文学》の問題を、「桜の森の満開の下」と「土神ときつね」を比較・検討作品として取り上げ、追究している。

第二章 遠藤周作小論―神の温もりと神秘主義―

遠藤周作に「賢治の『グスコーブドリの伝記』」という作品論がある。遠藤はこれ以外に賢治に関する評言を残しておらず、かつそれが賢治論として顕著な特質を示しているわけでないということもあって、これまで、遠藤周作を賢治と比較して論ずるということが

ほとんどなされてこなかった。本章ではまず、遠藤の賢治論の意義を神秘主義の視点から再検討し、遠藤が賢治作品に見出したところの神秘主義が、キリスト教文学者としての遠藤自身の抜き差しならぬ文学的課題であったことを立証し、そのうえで『沈黙』『死海のほとり』の作品分析を通じ、遠藤の試みた神秘主義との固有の格闘とその文学的成果を照らし出している。

第三章 大江健三郎小論—反転の思想—

第二部第四章で「よだかの星」に関し、「落下し草むらにその遺骸を横たえるよだか」の存在という問題を提起しているが、「よだかの星」執筆時における賢治は、思想的にいまだよだかの「遺骸」を凝視することができず、その存在をテキスト上に残すことができなかったとの解釈にもとづくものである。そのことが賢治をして「銀河鉄道の夜」の成立へと導かしめる内的動機となったと論者は考えているが、本章では、その前半において大江健三郎の『万延元年のフットボール』が「よだかの星」の問題を引き継いだ作品として読み得ること、さらには「銀河鉄道の夜」に比肩し得るものとして構想された作品であることを論じている。また後半では、大江の作家としての到達点と見られる『燃えあがる緑の木』を取り上げ、そこに神秘主義という賢治的課題の存在を確認し、作品に頻出する「てんかん」の病の文学的意義付けの分析を通じ、大江の現代作家としての果敢な取り組みを検証している。

以上の三章は、賢治作品と現代作家との比較研究である。坂口安吾、遠藤周作、大江健三郎の三作家と賢治文学との通底性が取りあげられ、論じられているが、それぞれの作家が賢治との類縁性のもとに論じられているために、個々の作家の固有性が十全に捉え切れていないという憾みを残すものの、これまでこうした試みは全くなかったわけで、賢治文学の広がりと普遍性を明らかにするための一つの試みとしては興味深いものである。

第四部 周辺研究

第一章 童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐって—発行者・近森善一の談をもとに—

高知県野市町出身の近森善一の名は、童話集『注文の多い料理店』の発行者として知られるが、これまでの評伝研究においては、賢治との関係や童話集出版の経緯に関し多々不明・疑問な点が残されていた。本章では、近森に関する新資料二点、①近森の高知県立農学校時代の教え子小松亮氏が記録していた聞き書き（昭和二十六年）、②窪川町にお住まいの長谷部伸作氏（土佐賢治の会会長）が録音・保管していたインタビューテープ（昭和四十一年）を紹介し、価値ある幾つかの新事実を公開することを通じ、評伝研究発展の一助となることを目指している。

第二章 詩集『春と修羅』の同時代的受容 —土佐の詩人・岡本弥太の宮沢賢治理解—

本章は、岡本弥太という宮沢賢治と同時代を生きた土佐の詩人が、いかに卓越した賢治文学の理解者であったかを明らかにしている。弥太は生前、賢治に関する三種の文章を書

き残しており、そのうちの一つは賢治研究者にとって未見のもので、またそれとは別の一つは弥太研究者にとって未見のものである。新資料を含むそれら三点の賢治論を読み解くことにより、同時代において弥太のみがよく捉え得た、「複眼的宗教」詩人としての賢治理解のありようを分析・紹介している。

第三章 《宗教的欲求の時代》と賢治受容 ―宮沢賢治生誕百年の喧騒―

宮沢賢治生誕百年における研究界・出版界の動向をまとめつつ、そこに立ち現れてくる現代における賢治受容の特質を、その危険性を含め問題提起していく。まず最も辛口の賢治批判であった吉田司の「〈遊民〉のバーチャルランド」（「文学界」）に注目し、その上で現代を〈宗教的欲求の時代〉と捉え返すことにより、現代の賢治論をリードする諸家が、島菌進（『精神世界のゆくえ』東京堂出版）のいう〈靈性的知識人〉と一致することを指摘している。結論として、吉田が賢治その人に向けた批判は、むしろ研究者を含む現代の賢治受容者に向けられた批判として有効なものであり、その陥りやすい精神類型からわれわれがどのように自由であり得るか、熟慮されねばならない課題であると指摘する。

第四章 「批評空間」における宮沢清六氏批判の言説―宮沢賢治の法華経信仰と国柱会―

「批評空間」（Ⅱ・14、平9）に掲載された「【共同討議】宮沢賢治をめぐる」における宮沢賢治・清六批判を取り上げ、その主張の根拠を洗い直す作業を通じ、討議者たち（柄谷行人・関井光男・村井紀・吉田司）の銜学的言説の危うさの所在を明らかにする。討議者たちは、賢治〈聖者伝説〉に対する批判を急ぐあまり、学問的根拠のないまま、その矛先を遺族に向けるという過ちを犯しており、そのような方法では、決して本来の目的である賢治〈聖者伝説〉の突き崩しを果たすことができないと主張している。

第四部は「周辺研究」として、第一章では童話集『注文の多い料理店』の発行者近森善一、第二章では賢治と同時代の詩人岡村弥太を取りあげ、これまで埋もれていた資料の発掘をしている。ともにこれまでの伝記的研究の欠落を補うに貴重な資料であり、その功績は大きく評価されてよいものである。また第三章、第四章では今日の隆盛な賢治研究にあって、ともすれば実証性の乏しい恣意的な賢治論が横行するなかで、そうした賢治論への異議申し立てをおこなったもので、賢治研究者としての自らのスタンスの明示するとともに今後の賢治研究のあり方に対する示唆に富む提言を示している。

3 総評

鈴木氏は既に二冊の宮沢賢治研究の著書を刊行している中堅の賢治研究者である。その一冊目の『宮沢賢治 幻想空間の構造』（蒼丘書林、平6・10）は、第六回宮沢賢治賞奨励賞を受賞しており、「国語と国文学」「日本文学」「日本近代文学」などの現在最も水準の高い学会誌にもその賢治論は投稿掲載されており、賢治研究者としての鈴木氏は既にゆるぎない高い評価を得ている。本論文はそれらの論文の中から一つのテーマに添う内容の論文を再編集して構成されたものである。

宮沢賢治に関して、これまで夥しい数の作家研究・作品研究が世に提出されてきた。鈴木氏の賢治研究は当初よりほぼ一貫して賢治文学における宗教・科学をいうことを問題としてきている。宗教的であることがなぜ文学であることを保証するのか、科学的であることがなぜ文学であることを保証するものかという問題である。先行研究において、賢治文学における宗教や科学の問題が論究されてこなかったわけではないが、必ずしも賢治や賢治作品における宗教や科学の問題が、文学との関わりにおいて追究されてきたとはいえない。宮沢賢治の作品には文学・宗教・科学の三位一体とでもいうべき特徴があり、その深さ・複雑さが、多くの読者を魅了し、かつ多くの研究者を悩ませてきた。これまでの日本近代文学史において宮沢賢治が正統に理解・評価され得なかった理由もまたこの辺りにあるということもできるのかも知れないが、文学的であることと宗教的であることと科学的であることが、なぜ互いに矛盾を起こさないのか。鈴木氏の賢治研究はそうした問題意識を持ち続けてきたところに書かれたものである。

鈴木氏の論がこれまでの賢治研究の欠点を十全に免れているかといえ、既に各章の論評にも記したように、氏自身の論も文学、宗教、科学を渾然と融合させ、文学作品としてトータルなかたちで論じきるところまではいっていない。賢治が眼にした可能性のある宗教関連の著書や当時の最新の科学書を可能な限り博搜し、そこから賢治作品の新たな読みを展開してゆこうとするとき、どうしても論自体が概念的にならざるを得ないことになり、これまでの賢治研究に通有な弱点を持つてしまうことは否めない。しかし、そのことは致命的な欠陥というわけではなく、ここに明らかにされたウィリアム・ジェームスの『宗教的体験の諸相』と賢治の宗教的体験を論じた箇所、及びヘッケルの進化論の受容や、片山正夫の『化学本論』やジョンミルス原著、寮佐吉訳『通俗電子及び量子論講話』などとの細部に至るまでの丹念な比較検証を通じて、当時の賢治が有していた科学的知識のレベルの考察などはこれまでの賢治研究を大きく進展させるものであり、宣教師ミス・ギフォードや童話集『注文の多い料理店』の発行者近森善一関連の資料の発掘なども今後の賢治研究に寄与するところは大きい。が、何よりこれまで賢治研究において宗教と科学が文学と切り離されて論じられる傾向にあったものを、その文学、宗教、科学の三位一体として取り扱い、既に繰り返し指摘したように必ずしも十全に成功を収めているとはいえないまでも、賢治文学をそれらの融合したトータルなものとして読み解こうとしている姿勢において高く評価し得るし、これまでの賢治研究から一頭地を抜き出るものがある。

以上の諸点から総合的に判断して、審査員全員一致して本論文が博士（学術）に値するものと評価できるという結論に達したので、ここに報告する。

以上

2004年4月2日